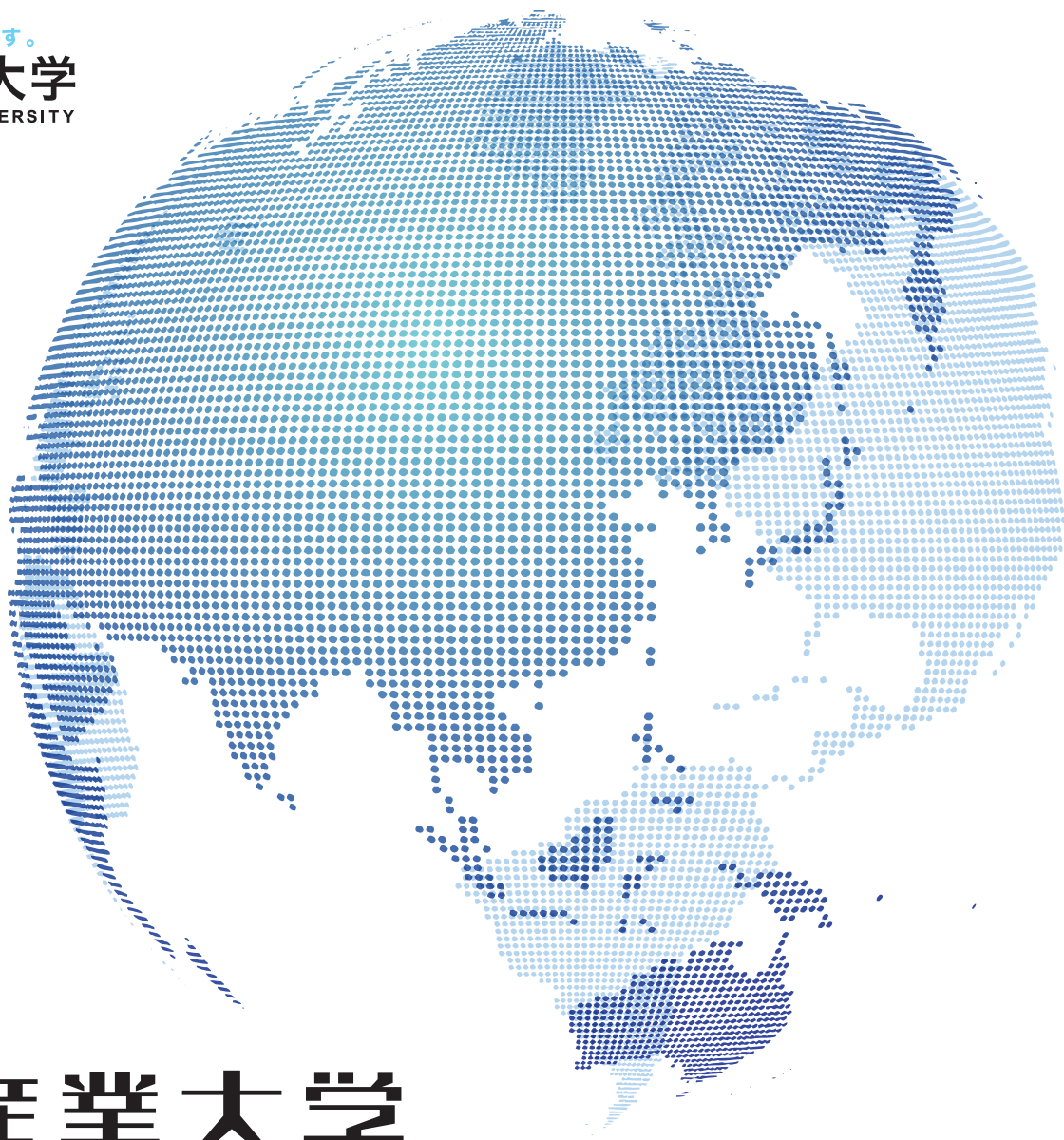




京都産業大学 世界問題研究所

ニュースレター 2022.1 Vol.4

NEWS LETTER

CONTENTS

活動記録

(1) 「諸科学融合の場としての世界問題研究所
——歴史と展望」 名誉教授 曾我見郁夫 2

(2) 「ウイルス性神経疾患におけるストレスの影響」
生命科学部 准教授 西野 佳以 3

研究紹介・エッセイ

諸科学融合の場としての世界問題研究所
世界問題研究所長・法学部 教授 川合 全弘 4

その他

世界問題研究所について

【活動記録】

(1)「諸科学融合の場としての世界問題研究所 ——歴史と展望」

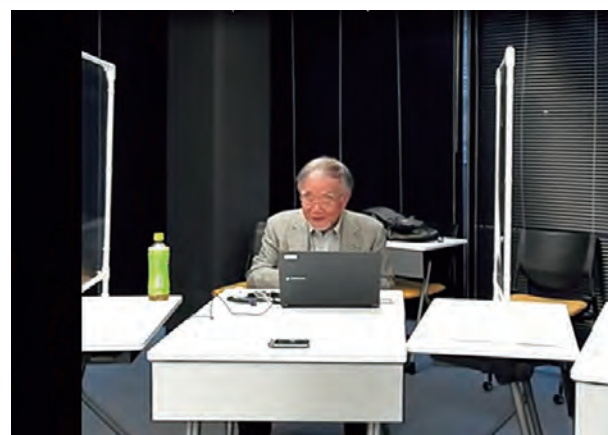
報告者	曾我見 郁夫（京都産業大学 名誉教授）
開催場所	京都産業大学 真理館 SR301 教室およびオンライン（Teams）
開催日時	2021 年 4 月 28 日（水）15:00 ～ 17:40

研究会概要

世界問題研究所では、2021 年度 第 1 回定例研究会に本学名誉教授 曾我見郁夫先生をお招きし、「諸科学融合の場としての世界問題研究所——歴史と展望」のテーマで報告をいただいた。かつて本学在職時に、理学部にくわえ世界問題研究所で学際研究に従事されたご経験をもとに、文理融合研究のあり方について貴重なお話をいただいた。内容は、若泉敬先生をはじめとする本学研究者の活発な研究活動の様子や、湯川中間子論と日本文化との関係、文理融合研究を推進するための具体的な方策の提言、さらには世界問題研究所が今後取り組むべき方向性等々広範囲にわたった。

本研究所では、「科学技術の発展と人類社会の変化」というテーマの下、文理を越えた研究交流の場として研究所を機能させることを企図している。今回の報告では、本学創設まもない時期に、荒木俊馬総長の強いイニシアティブの下、本研究所の下で文理を含む学際研究が活発に実施されていたことが示された。具体的なご経験から示された数々の問題提起や提言は、本研究所の今後の活動を推進する上で貴重な手がかりとなるものであった。

なお、本研究会は必要な感染症対策を講じた上で、対面・オンラインのハイブリッド形式で行った。



報告中の曾我見名誉教授

目次

[I] むかし話：研究所の歴史を振り返る

- (1) 概観
- (2) 最盛期の活動に学ぶ：私的総括
 - [A] 共同研究：シンポジウム形式
 - [B] 共同研究を踏まえた個別研究
- (3) 日本文化の評価：若泉の疑問に答える
 - テラックと物理学：湯川の間子論
 - 報告への質問

[II] これからの話：諸科学融合の場

- (1) 人文社会科学と理工学の共同研究の可能性
 - 共同研究、共著論文、科学と仮説
- (2) 組織のモーメンタム
 - 後継者の育成：真の研究者＝真の教育者

報告スライドより

（曾我見郁夫先生は 2021 年 12 月 15 日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。）

【活動記録】

(2) 「ウイルス性神経疾患におけるストレスの影響」

報告者	西野 佳以（生命科学部 准教授）
開催場所	オンライン（Teams）
開催日時	2021 年 5 月 26 日（水）15:15 ～ 17:50

研究会概要

世界問題研究所は本年度の第 2 回定例研究会を 5 月 26 日にオンラインで開催した。今回の研究会には本学生命科学部・先端生命科学科ウイルス学研究室 准教授 西野佳以先生をお招きし、「ウイルス性神経疾患におけるストレスの影響」というタイトルでご報告を行っていただいた。

ご報告では、まず生物学的にみたウイルスの特徴について解説があり、ヒトや動物の脳炎の原因となり多様な神経症状をもたらすボルナ病ウイルスに関して、西野先生ご自身の研究を中心に詳しい説明が行われた。ボルナ病ウイルスは、自然界では様々な動物種で感染が一定程度広まっていると推測されているが、有効な治療法が確立していないため、発症を防ぐことが肝要となる。そこで、発症の可能性を高めると考えられているストレスの影響を確かめるため、西野先生はマウスにストレスホルモン（副腎皮質ホルモンのコルチコステロン）を投与して検証する実験を行った。ご報告では、その実験の結果が映像資料なども用いてとても分かりやすく紹介さ



報告中の西野准教授

れた。また、付随して新型コロナウイルスについても、ウイルス学の観点から説明が行われた。

その後、全体ディスカッションに移り、ウイルスが生物兵器として用いられる可能性や、新種のコロナウイルスが流行する可能性、哺乳類の進化にウイルスが果たした役割、今後必要になると考えられるウイルス対策、日本のウイルス学の現状などに関して、活発な質疑応答が行われた。

【研究紹介・エッセイ】

諸科学融合の場としての世界問題研究所

世界問題研究所長・法学部 教授 川合 全弘

1.

世界問題研究所の所員は今のところすべて人文・社会科学系の研究者だけで占められている。我々はこの現状を、「人文、社会、自然の全学問領域にわたり」とその趣意書に謳われてある研究所本来の姿に少しでも近づけるために、今春から定例研究会に自然科学系の研究者を招いて自身の研究の概要を話してもらう、文理交流の企画を始めた。その皮切りとして四月度の研究会に本学名誉教授の曾我見郁夫先生をお招きした。先生は、かつて研究所が雄大な文明論的問題意識に立って実際に専門の垣根を超えた総合的研究を推進していた頃の、言わば生き証人である。「諸科学融合の場としての世界問題研究所——歴史と展望」と題する先生のスピーチは、ご専門の物理学研究の紹介にとどまらず、むしろ世界問題研究所の本来的な意義とそのための課題とを真正面から論じるものであった。筆者の心を捉えたのは、「諸科学融合の場」としての研究所の意義づけもさることながら、それを実際に創り出すためには何が必要かという核心的問題についての、鋭い指摘であった。世界問題研究所は「諸科学融合の場」であり、そのためには、異分野同士がどう手を結ぶかという戦略に加えて、何より「融合」の前提として諸科学自体における「自己変容」が必要である。研究所の将来像をめぐって考えあぐねてきた筆者は、この指摘に光明を見出す思いがした。学際的研究といい、文理の融合といっても、根本的には各専門科学が自らの専門において要求されるよりもいっそう広大な普遍性に向けて自らを開く、自己変容の努力が不可欠となる。この言わば当然の理に、筆者がなぜ

感銘を受けたのか。以下ではここに至る筆者自身の思案を整理することによって、60数枚のレジュメまで付して有難い助言を賜った曾我見先生のご厚意に対する、拙い謝辞としたい。

2.

本学に世界問題研究所が設置されて以来、すでに55年の歳月が経過した。無から研究所を創り上げた荒木俊馬、岩畔豪雄、若泉敬のお三方を第一世代、1970年代後半以降研究所を引き継ぎ、その存続を守り抜いた人々を第二世代と呼ぶなら、今日の我々は第三世代にあたる。第一世代、第二世代がみな本学を去り、一時期学内外に強烈な存在感を放ったこの研究所についての鮮やかな記憶もほぼ失われた今日、我々の最初の任務は、研究所の独特の存在をあらためて根拠づけることにあり、と思われる。これまで在ったからこれからも在る、という惰性はもはや働かない。組織・職制規程に存在理由を求める人任せは論外である。そもそも世界問題とはいかなる問題なのか。本学に世界問題研究所が無くてならない理由は何なのか。このような自問自答の繰り返しとともに、我々は共同研究プロジェクト「科学技術の発展と人類社会の変化」を昨春発足させた。

3.

その際に筆者が重視したことは、第一に世界問題研究所とその設置母体たる京都産業大学との初心

にいったん立ち戻ること、第二に現代社会の必要とそれに応えるために本学が有する利点とが何であるかを考慮すること、これであった。

研究所の創設にあたって初代岩畔所長が願ったことは、全面核戦争と人類絶滅の脅威を孕む現代世界の危うい在り方を、「人間性の恢復」の方向へと転換することであった。人類にとって世界が総じて問題と化しつつある。岩畔所長のこの問題意識の背景には、核物理学と原子力工学との急激な発展が無制限に核戦力の開発へと軍事利用されるに至った歴史があった。思うに今日の世界では、政治や軍事のみならず、経済や教育や医療も、ひいては勤労や社交や娯楽など日常生活の隅々に至るまで、言わば人間の営みの総体が、増しに発展する科学技術の——恩恵と脅威の両面を併せ持つ——甚大な影響下に置かれている。それゆえ初代所長が構想した世界問題という真に総合的な主題は、従来にも増して切

実なものとなっているのではないか。

本学創立者の荒木総長もこのような問題意識を共有していた。本学の設立趣意書には、「各学部が全く独立無関係な教科運営を行っている」既成大学界の現状と、「真の総合大学の実」を上げようとする本学の初心とが対比的に論じられている。現代社会が抱える複雑多様な問題に応えうる人材と人間とを育てるために、これからの大学は学部間の垣根を超えた総合的な教育を実施する「真の総合大学」と成らなければならない。ここに本学の初心があった。

4.

さて「世界問題」の研究と「総合大学」の教育に関して、本学は好条件を備えているのではなから



うか。すなわち、自然科学系 3 学部と人文・社会科学系 7 学部の計 10 学部が一つのキャンパスに集まる、異分野間の研究・教育交流に適した立地条件がそれである。このことは、それ自体としては以前から注目され、部分的には——筆者もその導入に携わった——融合教育（フレキシブルカリキュラム）の編成などにおいてその活用が試みられてきた。とはいえこの融合教育について見てみても、それはただ多分野の専門科目を一つのカリキュラムに配置すれば事足りるわけでない。総合大学といい、融合教育といっても、単に教育施設の立地や授業科目の配置だけで完結する事柄でなく、実際に学問に取り組む人間（教師と学生）自身においてそれらの実質が具現されなければ、その実を上げたとは言えない。従来の融合教育にはまだ何かが欠けているように筆者には思われた。

5.

曾我見先生の上述の指摘は、筆者年来のこの疑問に答え、ひいては世界問題研究所の存在意義をめぐる筆者の思案に光明を与えるものであった。諸科学の融合とその前提としての各専門科学における自己変容の努力、これこそが、総合大学と融合教育の理念を実現する力である。この魂が入ってこそ、総合大学も融合教育も本物となる。

自らを「諸科学融合の場」へと鍛え上げることを通じて、「真の総合大学」という本学の初心の成就に寄与すること、世界問題研究所の存在意義の一つはここに求められるのではなかろうか。

（2021 年 11 月記）



【その他】

世界問題研究所について

世界問題研究所は、我々が直面する人間世界の諸問題を多様な視座から取り上げ、その成果の融合を図り、未来に対する提言を行うことを目的としています。

《これまでの活動》

<https://www.kyoto-su.ac.jp/collaboration/sekaimondai/index.html>

《研究所メンバー》

氏名	所属	職名	専門分野
川合 全弘	法学部	所長・教授	西洋政治史
岩本 誠吾	法学部	教授	国際法
志賀 浄邦	文化学部	教授	インド仏教・哲学
岑 智偉	経済学部	教授	経済学
中谷 真恵	法学部	教授	比較政治
耳野 健二	現代社会学部	教授	西洋法史
久保 秀雄	法学部	准教授	法社会学

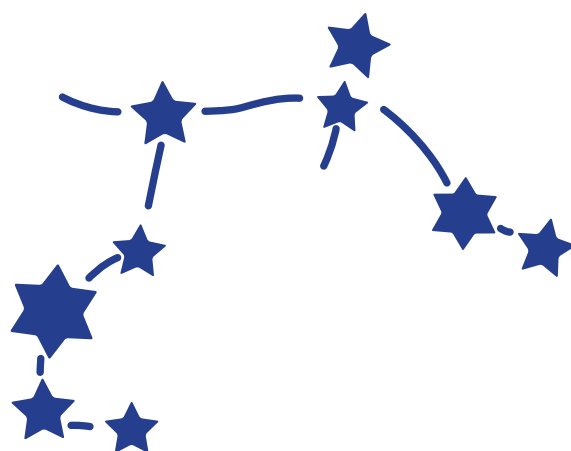
《ニュースレターバックナンバー》

https://www.kyoto-su.ac.jp/collaboration/sekaimondai/news_l.html



【所長挨拶】
世界問題研究所「ニュースレター」の発行に際して
世界は大きな変革期を迎えている。国際情勢の激変から経済、環境、エネルギー、社会、文化など多岐にわたる分野で、新たな課題が生じている。本研究所は、国際情勢と世界の発展に関する課題について、多角的な視点から研究を行い、その成果を広く社会に発信することを目的として、この「ニュースレター」を発行する。本研究所は、国際情勢と世界の発展に関する課題について、多角的な視点から研究を行い、その成果を広く社会に発信することを目的として、この「ニュースレター」を発行する。





京都産業大学世界問題研究所 ニュースレター 第4号 2022年1月

発行 京都産業大学世界問題研究所 京都市北区上賀茂本山 TEL (075) 705-1468

編集 京都産業大学世界問題研究所所員 久保 秀雄／同事務局 藤本 興子

印刷 中西印刷株式会社
